

後世に残したい戦争体験

平和の尊さを考える

石井 康男

はじめに

私は昭和10年に生まれ、2年後に中国東北(旧満州)に家族で移住しました。父が病院に勤務していたため現地の病院官舎で生活をしていました。当時の小学校は児童20人程で全学年制の複式授業でした。音楽や絵画の授業はほとんどなかったことが記憶に残っています。

20年8月にソ連軍が戦争に参戦し、私たちの暮らしは一変しました。

引き揚げ準備

昭和20年8月15日に玉音放送^{ぎょくおんほうそう}で敗戦を知りました。敗戦後、現地の人が暴動を起こすのではないかと不安を感じましたが、大きな暴動には発展しませんでした。しかし、ソ連兵により多くの犠牲者が出ました。また、労役のために連行された人も多くいました。

10月に引き揚げ準備の通達が入り、貴重品以外は持たずに出発しました。市街地から綏^{すい}稜^{りょう}駅^{えき}まで約4キロを大八車^{だいはちぐるま}などに荷物を乗せて移動しました。周辺にはトウモロコシなどの畑があり食料を確保しました。

当時、苦難の日々を無我夢中で生きていた

「天皇の肉声(玉音)を放送すること。
。貨車(こ)の一種で、砂利・鉱石・木材などの雨に濡れてもかまわない積荷を運ぶのに用いら

ため、この時咲いていたスズランの爽やかな香りが心を癒してくれたことが記憶に残っています。

綏^{すい}稜^{りょう}駅^{えき}で石炭運搬用の無蓋車^{むがいしゃ}に乗せられ、北に向かっているとすれ違う列車に詰め込まれた日本兵が、口々に故郷の地名と部隊名、氏名を大声で伝え、「帰国したら伝えてください」と叫んでいました。しかし伝言をする人たちが多く、全てを覚えることは出来ませんでした。

列車は石炭や水を補給するたび、停車しました。停車中は現地の人が略奪に来ることがあり、恐怖を感じていました。

数日後、長春(旧新京)に到着して収容所に入りました。大きなホテルの屋上に作られた仮設の施設は屋上全体を屋根で覆った体育館のような場所に約800人が収容されました。与えられたスペースは横になるだけしかなく、約1年間の生活が始まりました。

子どもたちの仕事は地下の井戸から生活水をバケツで運ぶことでした。毎日地下からバケツで最上まで往復し、水汲みができない家族には子どもたちが支援をしました。生活の際、困難な問題は炊事をする燃料がないことでした。そのため市内の木片を探してくることも子どもたちの大事な仕事でした。

水や燃料は全体で使用するため節約を心掛けていました。木片を拾うために旧日本軍の宿舎へ行った時、ソ連兵に見つかり機関銃を乱射され、道路の側溝に隠れて逃げた記憶があります。至近距離に飛来した銃弾はビチビチという音であって、音を聞いた時は逃げられないと思いました。

新京では国民軍と八路军^{はちろ}の市街戦が始まり

れる。
。日中戦争時に華北で活動していた中国共産党軍の通称。華南で活動していた新四軍と共

ました。收容所の前の広場（現在の勝利広場）を挟んで市街戦が展開されました。

時には砲弾が撃ち込まれ、建物が大きく揺れました。幸い屋上であったため砲弾からは逃れましたが恐怖でいっぱいでした。

内戦が続いている間は、食料と燃料が不足し、困難な状況でした。この間、病死した人が急増して遺体を地下の倉庫に收容していました。水汲みの時に幽霊が出たなどの噂が広がり、怖かったです。

この内戦で、日本人だけでなく多数の中国人も亡くなりました。

この時期、一度だけ飛行機が旋回し、紙幣が降ってきたことがありました。当時私は周りの子どもたちと夢中で拾い集めた記憶があります。

引き揚げ開始

昭和21年10月によく引き揚げの順番がやってきました。新京からの引き揚げ、貨物列車に乗ったのは100人程度と聞きました。

列車の運行は不規則でよく停車をして、燃料を補給していました。駅で停車をすると食料や水を求めて歩き回りました。しかし、列車が突然発車して乗り遅れた人もいました。胡蘆島ろとうに着いた時には80人程度だったそうです。

コレラ検疫や乗船手続きなどで收容されている時点で病死をする人や帰路の船中で亡くなる人もおり、博多港に到着して無事に上陸できたのは68人でした。200トンほどの貨物船に乗船。船首に大砲を外した痕跡がありました。船員から日本の流行歌を教えてもらいました。

博多港到着後、検疫のために数日間停泊し

に現在の中国人民解放軍の前身になった。

たまま待機をしました。10月13日に上陸後、最初に食べたサツマイモが甘くておいしかったことが忘れられません。

この引き揚げでは養母・私・弟の3人が無事帰国をしました。年が明けて1月、父がシベリアから帰国しました。

おわりに

現在の日常生活の中で「平和」を実感することとは多くありません。「平和」という言葉自体は、新聞やマスコミで多く使われ目にする機会は多いです。しかし現在日常生活の中で「平和」を実感するためには「平和」でない状況を疑似体験をすることが大事だと考えています。読書や映画、講演会などで疑似体験をしてください。伊丹市には原爆・沖縄戦・空襲・引き揚げなど多くの体験者が存在しています。しかし、その多くは高齢者となっている現状を考えると、多くの体験を見聞きするいい機会です。

どうかたくさんの方が関心を持って「生」の声を聞いていただきたいです。

〔広報伊丹〕平成29年8月1日号掲載